

高田宏

子供誌

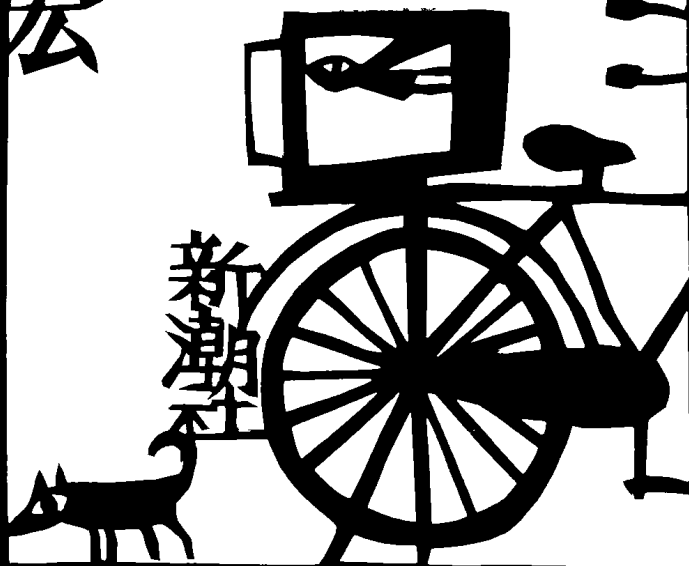


新潮社

子供誌

高田宏

新潮社



子供誌

一九九三年三月一五日発行

著者 高田 宏

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 営業部 (03) 三二六六五一一
編集部 (03) 三二六六五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社大進堂



© Hiroshi Takada 1993,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-329509-0 C0095

価格はカバーに表示してあります。

目

次

小さな冒険者 7

童どもの時間 21

遊ぶ子供の声きけば 35

ストリートチルドレン 47

消える子供たち 61

かくれんぼ 75

捨子今昔 89

ユートピアの育児 103

少女たち・少女雑誌

117

老と幼

129

動物と親しむ

143

森へ

157

わらべは歌う

171

失くした言葉

185

幼年期の終わり

199

あとがき

装画・安野光雅

子
供
誌

小さな冒険者

1

女の子の小さくて柔らかい手が、ぼくの手をぐいぐい引つ張つてゆく。斜度は三十五度を超えているだろう。急斜面に足がとられそうになる。女の子のビニールサンダルが脱げて小さな素足が崖の黒い土に踏み込んでいる。ぼくは、はらはらして、

「もう、ここでおしまい」

と女の子を止めるのだが、彼女はぼくの手をしっかりと把んで、

「あっち、あっち」

と上をめざしてゆく。木洩れ日に光っている白い花のところまで行くと、今度はもつと上の熊笹の手前の黄色い花群れを指して、

「あっち、あっち」

とぼくの手を引っ張る。そこへ行くには苔の生えた倒木を越えなければならない。この急斜面でそれは無理だ。ぼくは一計を案じた。ちよつと辛い気がしたが女の子をだますことにしたのだ。

「おんぶしてあげようか」

「うん」

おんぶしてしまえば、こつちのものだ。彼女の自由は奪われている。

「しくつ？」

「にささ」

彼女はぼくの肩越しに人差指と中指を立てて見せた。

「もうすぐ三歳？」

「うん」

振り返ってみると、この森のはずれの崖の中ほどまで登っていた。ぼくは女の子の気をまぎらせる話をしながら、一足ごと足場をたしかめてそろそろ降りた。

石鎚山麓のカルスト溪谷の入り口のことだった。道端に木工品の売店があつて、同行の写真家と二人でひやかしに入り、以前は山仕事をしていたという店の主人と話していたら、孫の女の子がぼくになついてしまい、店の主人と写真家を置き去りにして彼女とぼくの道行きになったのだった。

手をつないで道を歩いていると、彼女が崖下に捨ててある空箱に登ろうとした。そこから石垣

の上の森の斜面へ上がろうというのだが、石垣はぼくの背丈ほどあるので女の子にはとても無理だ。

「山に登りたいの？」

「うん」

女の子を石垣の上に持ち上げてやり、つづいてぼくが石垣をよじのぼった。

眉の濃い、しっかりした顔立ちの女の子だった。その目がきらきら光った。ぼくの手を引く力に、喜びがあふれていた。急斜面に空いたほうの手をついて登るので、小さな手が朽葉と土にまみれてゆくが、それを払おうともしないで一心に登る。

——野生児みたいな子だ。

ぼくは、あきれていた。こんな小さい子が山に夢中になるのは初めて見た。都会の子にこの斜面を登らせたら、たいてい泣き出すのではないかと思った。手足が森の腐葉土にまみれるのを気持ちわるがるのではないかと思った。

だが、そうでもないかも知れない。都会の小学生が山村でしばらく暮らすと、はじめは嫌がったり恐がったりしていた山を、やがて喜んで駆けまわるようになるという話とはときどき聞いたり読んだりしている。小学生ともなると文明生活にずいぶん慣れてしまっているが、もっと小さい幼児なら、はじめから山を喜ぶかも知れない。——この二歳の女の子のように、小さな冒険に駆け出すかも知れない。なにか目的があるわけではない、押え切れない喜びの衝動で。

一七九九年、ナポレオンが独裁政権を発足させた年の夏、南フランスのアヴェロンとタルヌの

県境にあるラ・コーヌの森で、素裸の男の子が、通りかかった獵師たちに捕えられた。推定年齢十一、二歳のこの少年はその後、医師J・M・G・イタールに引き取られて育てられ、その記録が『アヴェロンの野生児』として残されている。(邦訳は古武彌正訳と中野善達・松田清訳があるが引用は古武訳により、中野・松田訳の訳者あとがきを参考にさせていただく。)

イタールの下でヴィクトールと名づけられて六年間の教育を受けるこの野生児は、四歳か五歳のころ何かの事情で森に棄てられたと見られている。もっと幼くてはたぶん生存が不可能だ。その後の森での単独生活は、棄てられる以前に身につけていたものをすべて消してしまったようである。言葉はもちろん、人間社会の痕跡を全く残していなかった。

ヴィクトールは生まれつき知能の低い子供ではないかという議論が当時からあったが、そうであるともそうでないとも証明はできない。現代の精神医学者のなかには彼を自閉症児と見る人もあるが、もちろんヴィクトールを直接観察できないのだから推測の域を出ない。ただ、イタールの報告には、この野生児のなかにうごめくものの感じられるようなところがあちこちにあつて、ぼく自身の小さかった頃をかすかに思い出させてくれるように思う。

野生児の喜びの描写が、ことにそうだ。それは、ぼくの出会ったあの女の子の山中の喜びにも通じているように思う。

部屋にいたときのヴィクトールは退屈そうだ。単調にからだを揺すり、窓に目を向けて野原をものがなしげに眺めている。ところが……

……嵐のような風が不意に起こったり、雲の蔭の太陽があたりを急に明るく照したりしたなら、げらげらと大笑いして、窓を突き破り、庭へとび出んものと、得意の一種の跳躍によく似た前進、後退運動をなし、痙攣的な喜びを現わす。

いまぼくたちの使う「自然」という言葉は、どうも人間くさい。人間文明との対^ひでしか語られないようなところがある。野生児ヴィクトールも石鎚山麓の女の子も、そういう自然ではなく、生まの自然にじかに反応してしまうようだ。イタールの報告にはこんなところもある。

……また夜、月の光が部屋にさし込むと、夜中に身じろぎもせず突立ち、頭をうなだれ、一種瞑想の恍惚境にひたつて月明りの野原に眼をとどめ、この沈黙と不動との長い時間は、深い感激に必ずつきものの歎息のわずかな音によって、破られた。

イタールの『アヴェロンの野生児』からはもう一、二度引用することになるだろうと思うが、いまはこれで止めておく。

2

石鎚山麓の小さな女の子が、小学生、中学生、高校生となつて行くと、どんな子に育つだろう

か。どんな女性になるのだろうか。

あの溪谷と山々を駆けまわり、野性を抱えて育つだろうか。高校や大学で山岳部員にでもなるだろうか。いや、もしも野性を消さないで育ったら、近代登山には不適合をおこしそうだな、とも思う。あの子のあの山の中の喜びは、いまの登山とは別のものだ。統制集団で日本アルプスなりヒマラヤなりの高い山へ登る姿は彼女の未来には見えてこない。

それともあの子は、やがて山を忘れてゆくだろうか。幼い頃の山中の喜びはすっかり消えて、テレビに夢中になったり受験勉強に精を出すようになるのだろうか。ファッションに氣をとられてゆくのだろうか。

女の子はあのととき、山、すなわち急斜面の森そのものに、からだごと喜んでいたのだが、その焦点に野生の森の花があった。「あっち、あっち」と指す先に白い花や黄色い花があった。考古学や人類学では、大昔の人びとが草花を見るときにはそれが食用や薬用になるかどうかでしか見なかったように言うのだが、ぼくは前からそれに少し疑いを抱いている。食べられるかどうか、薬として使えるかどうか、それらはもちろん大きな関心事であつただろうが、花そのものが喜びを生み出してもいたのではないだろうか。ジーン・アウルの大河小説『始原への旅だち』はネアンデルタール人に育てられるクロマニヨン人の少女エイラの物語で、エイラは薬草の知識をネアンデルタールの養母から受け継いでゆくのだが、たしかあの小説のなかに、エイラが花に惹かれる場面があつたと思う。考古学文献を読みあさり野外生活を試みもした末の作者の想像ではあるが、大昔の人が実用のためだけでなく花の美しい薬草を採ってきて住居の近くに植えるというこ

とは、たぶんあっただろうとぼくは感じる。

花は、しかし、「美しい」という言葉で呼んでいいのかどうか分からない。「自然」という言葉がそうであるように、「美しい」という言葉も、いまの人間社会の物尺ものさしで言われている。ぼくの手をぐいぐい引いていった女の子のなかには、「美しい」という言葉や判断はなかったはずだ。花に、というか、花のある森に、彼女のからだがまっすぐ喜びの反応をして、そこへしやにむに向かつて行っただと感ぜられた。

ぼくが小さかったとき、いくつだったか分からないが、たぶん幼稚園に入るより前の日々、そこは北陸の小さな町なのだが、裏の空地によくしゃがみこんで、母に呼びもどされるまで長い時間、アリの巣を眺めていた。アリの生態を観察するなどという知恵を持つ以前のこと、ぼくは女の子が花に反応するのと同じようにアリにただ惹きつけられていたと思う。「美しい」などと思うわけはなく、「不思議」という言葉も持つてはいなかった。

その遠い日の感情、あるいは感覚が、かすかだけれども思い出せる。ミミズを飽かず眺めていたことや、カエルにみとれていたことも。——そうだ、モグラをつかまえて、なめし皮をつくろうとしたのは、もう小学校の三年生か四年生になっていた。なめしに失敗してモグラの皮はひどい臭いで腐ったものだった。ナメクジに塩をかけたのはもうすこし小さいときだっただろうが、そのときにはもう、ナメクジをただじっと見ていた幼児のときとは違って、知識の実験をしていたのだ。

ぼくの好きな野沢はら一という詩人は、よく小さな生きものをうたっている。昭和四年（一九二九

年)から約四年間、甲州の山の四尾^{しびれ}連湖畔に丸太小屋を建てて独居、『木葉童子詩経』という私家版詩集を一冊残しているのだが、そのなかにアリやコオロギやマツムシやハエがたくさん出てくる。ネズミやヘビも出てくる。

「蠅」という短い詩がある。

茶わんの水に溺れて困りいるはえを拾いて
ゆかに置き

翅のぬれて動きがたき頸^{うなじ}をたたいて

「そんなことをしていると死んじまうんだよ」と

いたづらをする

素直に嬉しかりしよ

その日大昔の良ろしさの帰り来て

雲は山にあらわれ

想いは炉辺にたたないて

埃にみてる藁の小屋に しばし

われ幸ある幼児とはなりにし

小林一茶のあの句、「やれ打な蠅^{うづ}が手をすり足をする」には、老成した大人の目がある。それ